

連載⑧

内海善雄の
(ITU元事務総局長)

やぶ睨み 「ネット社会」論

東京五輪に求めたい オリンピック精神への回帰

リオ・オリンピック、パラリンピックの興

奮と感動は終わり、いよいよ東京へとカウン
トダウンが始まった。何事も用意周到に準備
する日本人だから、東京大会は必ず「成功」
に間違いはない。しかし、クーベルタン男爵は
草葉の陰で何を思っているだろうか。現代オ
リンピックは制御不能な怪物になりかかっ
ている。

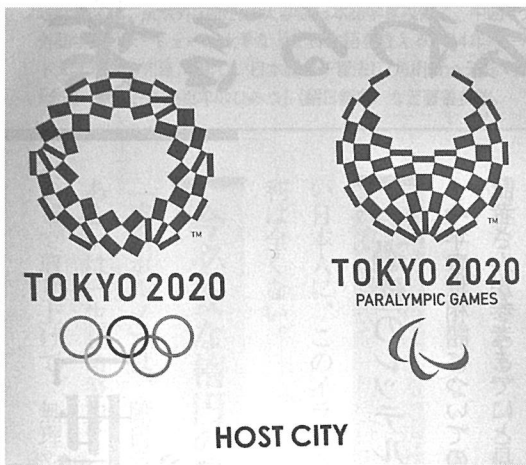
オリンピックは国家間の競争ではない

ご承知の通り、開催期間中はすべての戦争
を停止したという古代オリンピックを範とし、
スポーツ競技を通じて世界の平和を希求する
ことを目的に近代オリンピックは始まった。
オリンピック憲章では「人間の尊厳の保持に
重きを置く平和な社会を奨励することを目指
し、スポーツを人類の調和の取れた発展に役

激しい戦いが始まるとはとても思えない大興
行イベントと化している。

百十二年ぶりに再開されたゴルフは、その
典型である。プロ選手だけの競技は、各地で
開催されているプロ・トーナメントの興行と
何の違いもない。

商業化により競技種目も変わった。東京で
は、トラック競技や格闘技、競泳など、「よ
り速く、より高く、より強く」(憲章十条)のオ
リンピック・モットーを具現化する競技種目
中心であったが、女子体操だけは例外で美も
競うものであった。茶の間のテレビを通じて
見たチャスラフスカ選手の妖精のような姿は、
目に焼き付いて消えないものになっている。
その東京五輪の名花が、先日、世を去った。
リオでは、シンクロ、女子体操、新体操と



商業主義に毒されない凛とした大会を開催したいもの

立てること(憲章オリンピックズムの根本原則)」
と謳っている。

従って、「競技大会は、個人種目または団
体種目での選手間の競争であり、国家間の競
争ではない。(五条)」となっている。そして
国別のメダルランキング表の作成をIOCや
国内委員会が作成することを禁じている(五
十七条)。

しかし、日本選手の活躍に日本中が興奮し、
連日、日本のメダル獲得数が上位国と比較し
て報道される。日本を代表する選手だからこ
そ人々は興奮するのであり、一つでもメダル
獲得数を増やして国威を発揚してもらいたい
と思う気持ちは、人間に備わった自然のもの
である。だからこそオリンピックは存在し得
るのであると思う。

金メダルを求めて戦う選手たちも、その表
彰式での出身国の国歌の演奏や国旗掲揚が、
この憲章の趣旨には反するものであるといわ
れると驚き、意欲も失うだろう。

選手の技術レベルが高まるにつれ、一人の
金メダル級の選手を創出するには大変な経費
が必要になってきている。そのため国家が選
手育成事業を手掛けるようになったが、それ

女性美を競う競技の花盛りである。名花も数
が多くては名前も覚えられない。

さらに、巨額の放映権を得るために主要ス
ポーツイベントの開催時期と重複させないよ
う最もスポーツ競技に不適切な八月がオリ
ンピック開催時期となっている。酷暑の八月の
東京開催は、選手を完全に無視し、もはやビ
ジネス優先の何物でもないものとなっている
ように思える。

この五輪ビジネスに、さらに上積みがなさ
れた。それは、リオ閉会式での次期開催国の
パフォーマンスである。

安倍晋三首相がリオに扮して土管から出
てくる場面は、意表を突いたものであった。
それだけに、評価は分かれる。

大マスコミでは、いち早く海外での「好評
な反応」を紹介し、そのことをもってきわめ
て好意的に評価した。それを受けてか、組織
委員会から森喜朗会長の発案であるとの自慢
気な発表まであった。

一方、ネットやマイナーなメディアには、
「マリオに非難と嘲笑」「一国の総理のや
ることか」などの強い批判もある。面白
いことにこちらは、海外での「批判的な
反応」を紹介している。

いずれにしても、すでに東京開催は決
定されており、東京への世界の関心は、
いやがうえにも高まっていくものである。
閉会式では次期開催都市の首長がオリ

はこの憲章の精神に反していると思う。行き
過ぎるとロシアのように国を挙げてのドーピ
ングまで発展する性質のものである。

スポーツ競技という疑似戦闘行為で、人類
の戦闘本能を昇華しようとするオリンピック
運動は、オリンピックが盛大なものになれば
なるほど理想と現実にますます大きな乖離が
起きる矛盾を内在している。

ショービジネス化はいつまで進むのか

一九七四年に、オリンピック憲章は改訂さ
れ、プロ選手の参加が認められるようになった。
それから、近代オリンピックは様変わり
した。

改訂前の東京オリンピックでは、さわやか
な十月、代々木の国立競技場で整然とした選
手の入場行進によって幕が切つて落とされた。
まさにこれから始まるスポーツの祭典を彷彿
とさせる程よい緊張と興奮を伴った開会式で
あった。

しかし、リオでは、ちんどん屋さながらの
選手入場とカーニバル・ダンサー競演の、
初めから終わりまで長時間見ても飽きさせな
い楽しいショーだった。開会式は、これから

ピック旗を受け取るだけで十分で、十二億円
もの経費を掛けて次期開催国が追加演出を行
う必要があっただろうか。五輪のショービジ
ネス化は歯止めが利かなくなっているように
見える。

平和国家が開催するオリンピック

しかし、我々を本当に感動させたのは、レ
スリングの伊調馨選手や吉田沙保里選手、体
操の内村航平選手、女子卓球やバドミントン
など、商売とは関係なく必死で頑張る選手た
ちの姿ではなかっただろうか。それは、五十
二年前の東京大会となんら変わっていない。

二〇二〇年の東京では、世界平和を願った
近代オリンピック運動の精神を思い起こし、
商業主義に毒されない凛とした大会を開催し
てほしい。それが、オリンピック精神と
も気脈を通じる平和憲法をいたたく日本国が
開催するに相応しいオリンピックであり、そ
れを成し遂げた時、世界各国から称賛される
真の「成功」ではないだろうか。



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大(現
法政大学)法学部卒業。東芝を経て66年郵政省(現
総務省)入省。電気通信の自由化など、
通信放送政策を長く担当。98年
国際電気通信連合(ITU)事務総
局長就任。現在は一般財団法人「協
力」理事。IEEE名誉会員。